春和風雪

㉒

（題字　清水公照管長）

鈴木商店の遺産　昭和戦前

人力・帝商・政財界にも逸材を輩出

実に日着

大阪・中之島の江商ビル四階の一室は、ピーンと張り詰めた空気の中にも、若い男たちがかもし出す独特の熱っぽいふん囲気がただよっていた。

「新天地に理想の社会をつくろうではないか」。集まった四十人あまりの男を前に、新会社の創立発起人を代表して立った永井幸太郎（二代日商社長）が、メイフラワー号に乗って英国から新大陸に渡った清教徒の故事を引用してこう訴えると、静まりかえっていた室内から一斉に歓呼の声と拍手がわきあがった。

鈴木商店倒産から十カ月たった昭和三年二月八日。鈴木の大番頭、金子直吉の片腕として活躍した高畑誠一（初代日商会長）と永井の奔走によって、鈴木の事業を継承する日商（現日商岩井）がスタートを切った。高畑、永井ともに四十歳という若さだった。

資本金わずか百万円。役員、社員合わせ総勢たった四十人。三井、三菱と肩を並べるほど勢力を伸ばした鈴木の最盛期とは比べものにならないちっぽけな会社だ。世間では「〝金〟を失い、〝本業〟も捨てて、一体何をやろうというのか。三年ももてば上出来」と、陰口をたたく向きが多かった。

〝金〟は金子、〝本業〟は日商の母体となった鈴木直系の子会社日本商業を指す。金子という有力な指導者を失い、日本商業の名をちょっとばかりいじってみたところで何ができようかと皮肉ったのだ。

鈴木商店は倒産時でも従業員は千人を超し、中外商業新報によると、関連会社は帝国人造絹糸（現帝人）、神戸製鋼所、豊年製油など六十社を数え、資本金総額は約四億四千万円に達していた。それだけに、鈴木倒産が巻き起こした波紋は大きかった。

鈴木の従業員、関連会社は金融恐慌のまっただ中に放り出された。

豊年製油は台銀という〝ふうに株式の肩代わりあるいは吸収合併といった形でそれぞれ新しい資本系列へ移っていった。

帝人もその後、不幸にも台銀所有の帝人株の処分をめぐって起こった〝帝人事件〟という疑獄事件に巻き込まれたものの、債権のほかに資本金の三倍にも達する二千六百万円もの負債を抱えて、完成したばかりの岩国工場が差し押えの危機にひんしていた。他の関連会社の窮状は容易に想像できよう。

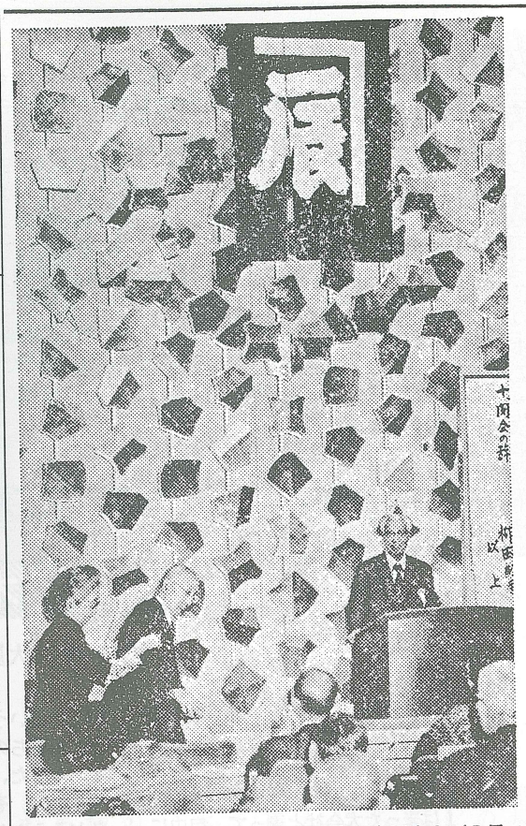
神鋼は三年三月に開いた臨時株主総会で債権者の台銀から社長をはじめとする五人の役員が送り込まれた。翌四年には再建策として播磨造船所（現石川島播磨重工業）の分離に踏み切っている。

他の関連会社も日本製粉、大日本セルロイド（現ダイセル）、クロード窒素工業・第一窒素工業（現三井東圧化学）は三井へ、人絹糸ブームに乗って発展。台銀管理下にあった神鋼も九年に鈴木出身の田宮嘉右衛門が社長に就任して、念願の自立を果たす。

鈴木が残した事業で現在も第一級の企業として活躍している会社は多い。これらの企業が親会社の破たんにもかかわらず発展していったのは、軍備拡張、大陸進攻などに伴うインフレ景気が到来したことも幸いしたが、やはり日商にみられるように堅実主義の中にも、金子に学んだ鈴木の積極果敢な事業精神をうまく取り入れていったことが力になった。

また、金子の薫陶を受けた人材の中から北村徳太郎（片山内閣運輸相、芦田内閣蔵相）、大屋晋三（第二次吉田内閣商工相、第三次吉田内閣運輸相）ら政財界で活躍した逸材も多く生まれている。すい星のごとく経済界の表舞台に登場した鈴木商店は、昭和恐慌で燃えつきたが、そこから散った火の粉は事業となり、人となり、事業精神となって鈴木時代以上に燃えさかっているといえよう。

――文中敬称略



鈴木商店関係者で作っている辰巳会の全国大会（5月12日国立京都国際会館で＝左側立っている人が高畑誠一夫妻）

暑中お見舞
昭和52年盛夏

東京海上火災保険㈱須磨代理店
太洋真珠販売㈱神戸販売店
山本濱一
〒六五四
神戸市須磨区月見山町一丁目二ノ一五
電話（〇七八）七三一―二二二〇

県立龍野高校同窓会名誉会長
自衛隊揖龍地区父兄会会長
八十川榮治
〒六七九―四一
兵庫県龍野市龍野町川原町一一九
電話（〇七九一六）二―〇三〇一

〈来信〉

拝啓　深緑快適の季節となりました。

ここ四・五日間は貴地方並に旭川、札幌、函館は高温で真夏のような暑さでした。而し未だ本物ではないようですが、草花、花木類は自然に順応して咲き競うております。今はつつじの時季です、札幌ではアカシヤが早々と咲きよい香りをただよわしていると報導していました。このような暑さが増して来ますと寒さによわい老生などは蘇生の思いです。

過日（6月8日）に辰巳会全国大会の記念写真を頂戴いたしました、御芳情の程厚く御礼申し上げます。鈴木商店回顧五十周年と云う意義ある大会でありましたのに御祝儀もお送りもせず誠に申し訳ないことをしたと赤面の至りに存じます。

随分大勢のお集り当日の盛大が偲ばれます。来る年も来る年も参会できず只々残念、情けなく思います。滝川から函館へ戻りましてから早くも十二年にもなります。旧知の方々も（自分も含めて）それだけ年数（年令）も多くなったわけでお名前は知っておっても写真では殆ど記憶に出て参りません。お顔の判る方は最長老の高畑さん、永井さん、次に柳田さん、松岡君、梶川君（東京在住）だけです。最前列の左から三人目は竹下君、五人目は嵯峨崎君ではないかと思います。米田幸吉、芦谷増吉、宇津木亥一、小倉五郎等の諸兄もおられるのでしょうがどうしても判りません、お序の節はどうぞよろしく御伝言の程お願いいたします。

何んと申しても高畑さん永井さんなどが御健在なことは心強く誠に喜ばしいことです。柳田さんもオツムは真白になりましたが頑健そのもののようにお見受いたします、此の上ともかくしゃくとして辰巳会存続発展のため御尽力下さるようお願い申し上げます。

降って小生儀は昨年十月末から高血圧が悪化し年末迄びっしり床につき昭和五十一年末でこれで終着駅下車かと思いましたが正月以来漸次回復目下の処正常に近いものになりましたが心臓に少し狂いが来たようです、日常生活には支障はありませんが薬はつづけ生活態度に充分注意を払ってすごしております。

先ずは右略儀乍ら御礼申し上げます。

昭和五十二年六月十日　敬具

柳田義一様　机下　桜庭亥一郎